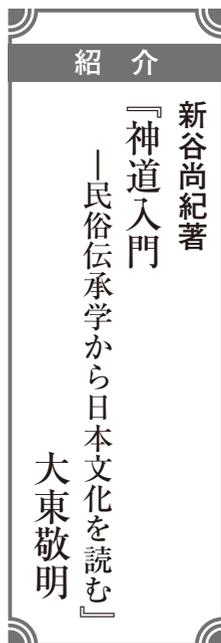


# 國學院大學學術情報リポジトリ

〔紹介〕 新谷尚紀著 『神道入門—民俗伝承学から日本文化を読む』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大東, 敬明, Daito, Takaaki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00000399">https://doi.org/10.57529/00000399</a>



本書は、著者である新谷尚紀氏が専門とする「民俗伝承学」の立場より、「神道とは何か」などを解説すべく、神道史を整理し、まとめたものである。

「民俗伝承学」について著者は、変わりにくい「伝承」の部分と変わってしまう「変遷」の部分の両者があることを含めてその広義の「伝承」という文化現象を歴史の中に追跡し、その動態を明らかにしようとする学問であるとする。神道については、「その実態はいわば動画であり、それを静止画としてある時期の神道をもつて、真の「神道」とはこれだ、というふううに、固定化させて考えるのは、大きなまちがいのもと」（六五頁）とし、いくつもの信仰が繰り返し「上書き保存」されたものととらえる。また新谷氏は『氏神さまと鎮守さま 神社の民俗史』（講談社、二〇一七年）において、現在の神社祭祀の多様性の

中には、日本の神祇祭祀が歴史的に経験してきたいくつもの形式や形態が伝存している（二八頁）とする。本書が「神道入門」ではなく、「神道入門」であるのは、現在の神道を把握するには、その歴史を理解する必要があると考えているためである。そして、神道にとって変わらないものとは、「古代以来、稲作の王としての天皇を中核として伝承されてきている人びとの素朴な自然と生命への感謝の念と禊祓えの実践によるその信仰の意思表示の体系である」（十一～十二頁）とする。

さらに著者は「あとがき」において、「折口信夫の神道論ノート」（『明治聖徳記念学会紀要』復刊第五十一号）を執筆したときに柳田國男や折口信夫の独創的な学究の視点と方法に対する理解を、歴史学以外にも学際的に、国際的にもっともつと発信していく必要があることを痛感したとする。近年、斎藤英喜氏によって近代神道史の中に折口信夫を位置づける必要が指摘され、著者も「折口信夫の神道論ノート」において折口の神道に関わる業績をまとめている。柳田・折口の業績を本書第六章「近代立憲国家の近代神道」にどのように位置づけてゆくのか、今後の新谷氏の研究が楽しみである。

（ちくま新書 一三三〇、二一八頁、筑摩書房、二〇一八年五月発行、定価七八〇円＋税）